

立川

8

立川と語ろう 立川に生きよう
August 2008
écoutez bien Vol.27 No.285





立川にごちそうあり!

(1)

人が増え建物が聳えてさま変わりしても、ここはやっぱりおらが街。
ホッと一息つくひととき。気の合う仲間と、親しい人と、時には家族で、時には一人で。
〈立川ならでは〉の大満足。

スペインから Hola!



ミックスパエジヤ 3200円(2人前から)



仔羊のソテー 羊飼い風ソース 2300円



ハモン・イベリコ

1日3食+2回の軽食がスペインの伝統的な食生活。一番重要な食事は昼ごはん。日が最も高くなる午後2時頃、ゆったり食事。ジリジリ照らす暑い日差しを避けて、食後はシエスタ。早朝から働く人々の午後の休息だ。

スペインといえば、闘牛! フラメンコ、ガウディ、F1レーサーのフェルナンド・アロンソ、テニスのナダル……。聞いただけで血が熱くなる。南に北に海を見るスペインは、地方によって食事メニューにも特徴がある。

今回紹介するのはバレンシア地方に伝わる人気メニュー〈ミックスパエジヤ〉。サフランパウダーの紅い色は、サッカーチーム バレンシアCFのユニフォームのよう。ムール貝、あさり、いか、えび、鶏など、8種類のバラエティに富んだ素材の持ち味が、生米から炊いたごはんにしみこんでいる。オリーブオイル、にんにく、トマト、

鶏ガラスープ……。得点王ダビド・ビジャの多彩なプレーを語りながら、大勢で食べればなおおいしい!

もう一品。スペイン料理店ではあまりお目にかかるない〈仔羊のソテー 羊飼い風ソース〉。やわらかい肉に酸味のきいたソースがからまる。素材にこだわっているから、仔羊が苦手な人でもおいしく食べられるロス・クアトロ・ガトス自慢の一品。

パエジヤと仔羊のソテー、二人で食べればひとり3000円でおつりがくる。前菜にはハモン・イベリコ(イベリコ豚の生ハム)や自家製オリーブの塩漬けがいい。オリーブは最高級のギリシャ産。臭みのないサラッとした味に、ついもうひとつもうひとつと手が伸びる。

立川通り沿い、少し奥まった感じのロス・クアトロ・ガトス。いつ行っても、ごちそうとすてきな笑顔が出迎えてくれる。

大人にも居場所が必要なんです

自宅を改装して「ふれあいギャラリー」を作った
中野誠一さん



■芳賀敏博（はが・としひろ）／えくてびあん編集長

■中野誠一（なかの・せいいち）／昭和四（一九二九）年、八王子生まれ。空襲に遭って家族とともに立川に移りそれ以来の立川育ち。富士見町で父が始めたスーパーを引き継ぐ一方、青少年育成など地域活動に取り組む。二〇〇二年から始まった学校の週五日制に伴い、地域の子どもたちの居場所づくり活動として有志とともに「富士見土曜クラブ」を始め、活動を続ける。今年六月、自宅を改装して地域の文化交流の場「ふれあいギャラリー Nakano」を開設した。

於：「ふれあいギャラリー Nakano」（富士見町）写真：小林達実

芳賀 中野さんは「富士見土曜クラブ」で子どもたちの行事があるときとか、滝ノ上会館の催しなどでよくお会いしているんですけど、今日はご自宅を改装してこんな素敵なお部屋になさったというので、ぜひお話を聞きたいと思ってうかがいました。

中野 最初は趣味の陶芸の工房と、ちょっと作品を並べられる場所というつもりだったんですが、せっかくなら皆さんに使ってもらえるようにしたらいいんじゃないかなと思いましてね。富士見町でいろいろな趣味を持つ方たちが「ふれあい」という会を作つて運営を手伝つてくださることになり、同人の皆さんのグループ展でスタートしました。

芳賀 中野さんの陶芸のほかに、絵画あり写真、彫刻、ちぎり絵、版画、書

道、お花、船模型、パッチワーク……にぎやかでオーブニングらしい（笑）。

中野 趣味とはいえたが教えている人もいますし、レベルが高いです。地域にこういう人たちがたくさんいらっしゃるんですよ。

芳賀 そういう人たちがちゃんと集ま

るというのが、ここの力というか、中野さんの人徳なんじゃないかなと、いつも思うんです。

中野 いやいや（笑）。私こそ、いろいろな人と知り合えて、生き方の幅というのかな？ そういう恩恵にあづかっているんです。ずっと富士見町の商店街にいて、仕事の上では流通業の大企業の中学校に進んでいますが、市内の中学校の合唱コンクールに呼ばれて市民会館に行つたら、クラブに来ていた子どもが指揮をしていたりピアノを

地域の青少年育成などに関わって、すばらしい方たちに出会うことができた。商売では味わえなかったような楽しいことを、いっぱい経験させてもらっています。

芳賀 「富士見土曜クラブ」もそういうことのひとつ？

中野 青少年育成はずいぶん昔から関わらせていただいてきたんですが、6年ほど前小学校が週2日休みになるというので、子どもたちの居場所づくりに新しい組織を立ち上げようと呼びかけました。活動の場所は滝ノ上会館の管理運営委員長をしていたのでめどがつきましたが、さて「お金はどうする？」。とりあえずあてがないわけです。それでも一人千円ずつでも出してやろう、という方が数十人集まりました。行政も助成してくれるようになり、寄付を下さる方も出てきましたが、最初に自腹を切つても地域の子どもたちのために何かやろうという人たちがいた。ありがとうございます。その方たちがこのクラブの核ですし、それぞれすばらしい知識や能力を持っている人たちが集まってくれたことで、継続する力にもなってきたと思います。ハイキングや登山は、最初は子どもたちが集まりませんでしたが「一人でも行きたい」という子がいたら実行」という方針を変えずに続けました。

芳賀 繼続は力、ですね。

中野 続けるためには、自分たちも楽しくないといけないんです。苦しい時もありましたけど、子どもたちが楽しそうにやっているし自分たちも好きだから続けられる。土曜クラブに低学年から参加していた子どもたちがちょうど中学校に進んでいますが、市内の中学校の合唱コンクールに呼ばれて市民会館に行つたら、クラブに来ていた子どもが指揮をしていたりピアノを

弾いていたり。クラスのリーダーになっている。それを見て何だかジーンとしました。年齢の違う下級生の世話をしたり、先生や親とは違うふつうの大人と一緒に行動していたことが自然に生きているのかなと……。子どもたちが何かを得てくれたのと同じように、関わってきた大人にとっても楽しみになっていますね。今ではハイキングや自然観察は子どもだけでなく、大人の参加者も多いんです（笑）。

芳賀 中野さんは、やっぱり人と人をつなぐ引力のようなものがあるんですよ（笑）。

中野 地域のみなさんのおかげですよ。このギャラリーも「ふれあい」という名前で、みんなが交替で詰めてくれて、個人で展覧会をする方もやりやすくしてくれました。私は自分が楽しいからやっているだけ（笑）。陶芸だけでなくお茶に俳句、文楽、それに「音楽を楽しむ会」を作つてオペラを鑑賞したり。まあいろんなことをやっているわけですが、自分で楽しみながら皆さんニコニコして集まってくれるから続くんです。7月には私の陶芸展をやれと言われていますが、まだ並べても面白くないから小さなお茶席みたいな場所を設けて、お茶も楽しんでもらおうとか。楽しいことを考えるだけで楽しい。このギャラリーのことを新聞が載せてくれたので、他の地域の方もどんなところだろうと見にこられます。どんな地域にもいろいろな才能を持った方がたくさんいるはずです。人のつながりができる場が各地域にできたら、もっとすばらしいことができるんじゃないかなと思いますね。

中野 実は去年大病をしましてね。頭を手術して今もこういう帽子をかぶっていますが、入院して寝ていると、自分があとどのくらい生きるかなと考えてしまう。じゃあ、自分がやりたくてやってきた陶芸をもう少し深めてみよう。それで窯を築き、ギャラリーも作ったわけですが、見てみると、ここから人と人のつながりができるきっかけになると嬉しいと思うんです。例えば写真とか絵とかが並んでいて、そこに作者もいるでしょう。「この写真はどう撮ったの？」「いやあ、こういう苦労をして撮ったんですよ」



とか、会話しながら自然なつながりが作りやすいじゃないですか。ありがたいことに、この地域にはいろんな才能を持った方がいます。たくさんの出会いができると思うんです。表の看板も、近くの石田倉庫にいる作家の人がすぐに作ってくれました。素敵でしょ。

芳賀 中野さんは、やっぱり人と人をつなぐ引力のようなものがあるんですよ（笑）。

中野 地域のみなさんのおかげですよ。このギャラリーも「ふれあい」という名前で、みんなが交替で詰めてくれて、個人で展覧会をする方もやりやすくしてくれました。私は自分が楽しいからやっているだけ（笑）。陶芸だけでなくお茶に俳句、文楽、それに「音楽を楽しむ会」を作つてオペラを鑑賞したり。まあいろんなことをやっているわけですが、自分で楽しみながら皆さんニコニコして集まってくれるから続くんです。7月には私の陶芸展をやれと言われていますが、まだ並べても面白くないから小さなお茶席みたいな場所を設けて、お茶も楽しんでもらおうとか。楽しいことを考えるだけで楽しい。このギャラリーのことを新聞が載せてくれたので、他の地域の方もどんなところだろうと見にこられます。どんな地域にもいろいろな才能を持った方がたくさんいるはずです。人のつながりができる場が各地域にできたら、もっとすばらしいことができるんじゃないかなと思いますね。

中野 実は去年大病をしましてね。頭を手術して今もこういう帽子をかぶっていますが、入院して寝ていると、自分があとどのくらい生きるかなと考えてしまう。じゃあ、自分がやりたくてやってきた陶芸をもう少し深めてみよう。それで窯を築き、ギャラリーも作ったわけですが、見てみると、ここから人と人のつながりができるきっかけになると嬉しいと思うんです。例えば写真とか絵とかが並んでいて、そこに作者もいるでしょう。「この写真はどう撮ったの？」「いやあ、こういう苦労をして撮ったんですよ」

| | |
|------------------|----------|
| 特むし銘茶・海苔 菊川園 | 526-2035 |
| ジョイフルプラザ | 529-2772 |
| Cafe COLORADO | 526-2285 |
| 日本空手道 佐藤塾 | 548-7460 |
| 株式会社 立川紙業 | 527-6111 |
| Fashion You Me | 523-1640 |
| 石原薬局 | 523-4067 |
| サイクルハウス 輪輪館 | 522-8100 |
| ビジネスHOTEL クボタ | 522-1122 |
| いなげや 立川南口店 | 526-2947 |
| 株式会社 正盛堂 | 522-2328 |
| いなりすし・のり巻きすし 松月 | 523-4758 |
| 小林歯科クリニック | 527-8217 |
| ピューティーサロン ウィスタリア | 527-1116 |
| オリオン書房 サザン店 | 525-3111 |
| とんかつ専門 かつ亀 | 525-7647 |
| 西武信用金庫 立川南口支店 | 529-1311 |
| 多摩信用金庫 南口支店 | 528-2211 |
| りそな銀行 立川支店 | 522-4161 |
| オリオン書房 アレア店 | 521-2211 |

えくてびあんの輪
立川と語ろう 立川に生きよう
えくてびあんは
リストのお店にいつもあります

今月は 柴崎町・富士見町のお店です。

| | |
|-------------------|----------|
| ほっとスペーす 中屋 | 522-2932 |
| サンカメラ | 522-3336 |
| Coffee Shop LARGO | 525-6704 |
| パッケージプラザ カサイ | 522-8601 |
| けやき出版 | 525-9909 |
| 手打ちぎょうざ工房 | 522-4770 |
| こむろ酒店 | 522-2613 |
| 喫茶ギャラリー花 | 524-3668 |
| 矢沢歯科眼科 | 525-6600 |
| 手作りケーキラ・フレーズシクレ | 525-3513 |
| 株式会社 京王ストア 立川店 | 540-1131 |
| 武本測量株式会社 | 524-5503 |
| サーフショップ Waioli | 522-7331 |
| ジャガ一立川 | 524-5859 |
| NPO法人 東京賢治の学校 | 523-7112 |
| 株式会社 浅見酒店 | 522-2823 |
| 伊藤接骨院 | 524-7861 |
| デイケアセンター Aso | 524-7231 |
| カットハウス ひまわり | 523-8619 |
| 手作りケーキの店 プティ・パニエ | 529-8364 |

ストリートからもらった夢

2人で実現させた路上ライブ

6月最初の日曜日、立川駅に近い高島屋正面入口前でライブイベントが行われた。

第2回「アコースティックフェスティバル」。

ストリートで演奏するアーティストが好きな若い女性ふたりが、何もないところから仲間や多くの人たちの協力を得て実現した。たとえ小さくても、ささやかでも、夢をストリートに託す演奏家たちからもらったエネルギーと、思いを形にした「夢の路上ライブ」。

写真：小林達実



フェスティバルを主催した実行委員会の代表・小島裕未さんは大学3年生、副代表の加藤由里恵さんはこの春まで保育士。立川で生まれ育った同じ年の幼なじみが、あるストリートミュージシャンとの出会いから“追っかけ”に。路上から自分たちの音楽を伝えようとする演奏家たちを知った。

ファンとして聴くだけでなく、路上で警官に演奏を止められたりするミュージシャンの演奏の場を作りたい。それで街を活気づけられれば——最初はメディア社会学科で学ぶ小島さんが「自分の街でイベントを立ち上げる」という課題で作ったプランだった。指導教官の勧めもあって昨年夏、企画書を持ってショッピングモールやデパートへ。

ふたりともイベントを企画運営した経験なし。好感触があった会場からも断られ、あきらめかけた頃高島屋が会場提供にOK。昨年11月18日、第1回「アコースティックフェスティバル」開催となった。大急ぎで出演者を決め楽器店などにプログラムへの広告をお願いしスタッフを集め……すべて初めて。無我夢中でなんとか終わったが結果は大赤字。「やる意味あったの?」「もうやめようよ」。徒労感だけが残った。

すっかり落ち込んだ時、出演アーティストのひとりがなぐさめてくれた。「やったことはゼロじゃないよ」。今度は加藤さんが牽引した。「このまま終わらせたくない」。3月末で保育士を辞めた。出演者は? 協力は? 実現できる確信などない。泣きたくなる時も「気持だけで」走った。3組の出演者が決まり、スタッフにはやはりストリート好きの仲間が集まってくれた。立川市、立川まちおんも協力。予算や実施計画も綿密に立て、出演者・スタッフへの心配りにも努めた。

プログラムもスタッフTシャツも全部手作り。ほとんどの準備は路上で作業した。当日、フェスティバルが無事に終わり撤収が済んだ夕方、スタッフの打ち上げも路上でジュースを酌み交わした。「ストリートが私たちの原点ですから」。

加藤さんは今、アルバイトをしながら音楽関係の仕事に就きたいと活動している。小島さんは最終学年を控えて進路を思案中。だが、ふたりともいつか立川の街で仙台の定禅寺ストリートジャズフェスティバルのような街全体で音楽が聴こえるイベントをしたいと願っている。ストリートからもらった夢——どう育っていくだろうか。



小島さん(右)と加藤さん(左)



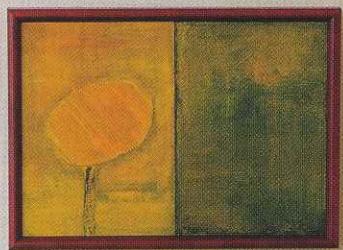
古寺チハル GRIMM CLOVER



さとう その子の アート気分

①

アトリエを引っ越しました。といつても自宅兼用のもともとのアトリエから数軒離れた同じ外人ハウス。BONZさん（夫で銅板彫刻家の赤川政由さん）が工房を青梅から立川に戻して手狭になったところに、ちょうど空き家が出たので思い切って。かなり古いんですが使いやすいし雰囲気があるんですね。友人が仕事台や棚をつくってくれました。生活空間に作品を並べてみると、あれ？これはこんな感じだったのかって。新鮮な発見があります。



〔インド〕

〔もとへ〕



写真：五来孝平